

## モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカについて

ゲルハルト・シュミッツ

(西川洋一訳)

みなさま、まず最初に、東京大学史料編纂所への丁寧なご招待に、心より感謝を申し上げます。モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ (Monumenta Germaniae Historica、以下MGHと略) は、来年、史料編纂所の記念シンポジウムにご招待いただいていることを、非常な名誉と考えております。シンポジウムへの参加が、そしてひよっとしたら私の訪問も、私たち両研究所の間のよりよき相互理解に寄与しうることを願っております。

### MGH本のコレクションと研究所

まず、MGHについてお話する際には、一体何について話しているのかをはっきりさせることが必要です。というのも、どれか辞書や参考書をご覧になるなら、ひよっとしたらそれが中世史の史料の刊本の大規模なシリーズだという説明しかないかもしれないからです。例えば「エンサイクロペディア・ブリタニカ」では、MGHは「一五〇〇年までのドイツ史についての重要な歴史家の総てのテキスト、及びこの時代に該当する、法、皇帝や王の古記録、その他書簡のような様々な重要文書」のシリーズであるとされています(一七版「一九五三年」六二五)。このような定義は、決して誤りではありません。私たちの「総目録」に、M

GHが創立以来刊行したものの総てが挙げられています(この目録は私たちのウェブサイトを<http://www.rhgh.de>でも見られます)。史料の刊本のコレクション、これがMGHの一つの意味です。

しかしもちろん、誰かが作業をしてこの刊本を準備しなければなりません。ここからがMGHの人的側面、施設としての側面の問題となります。両側面とも、草創期以来多様な変動を被りましたが、それをこと細かに論じてみなさんを退屈させるのは控えたいと思います。しかし、あるいは次の点だけは申し上げておきましょう。われわれの研究所の創立の時点は、非常によく判っています。一八一九年一月二〇日、さらに正確に言うと午後二時、フランクフルトで、フライヘル・カール・フォム・シュタインと、何人かの志をもつる人々によって、ドイツの古い時代の歴史を研究する協会が設立されたのです。

### 研究所の任務と目標

MGHのマークの銘文には、(まだ当時学問の世界の共通語であった)ラテン語で *societas aperiendis fontibus rerum Germanicarum medii aevi* と書かれています。ドイツ語では端的に、「中世ドイツ史の史料の解明のための協会」ということになります。これがMGHの歴史の第一

日以来の目標であり、今日までわれわれはこの目標の達成を責務として  
います。

いま、MGHの創立の年月日と目標―すなわちドイツの史料の研究、  
編纂、公刊―に言及したわけですが、そうすると自動的に二つの問いが  
浮かんで参ります。第一に、創立の年月日は単なる偶然だったのか、第  
二に、ここでは「ドイツ」とはどういう意味か、ということです。第一  
の問いに対する答えは、「もちろん否」です。しかし第二の問題は、今  
日に至るまで、満足のいく形では答えられていません。ナポレオン戦争  
後の時代のドイツの政治的雰囲気全体は、フライヘル・フォム・シュ  
タインの計画のようなものにとっては好都合でありました。それは初期  
の国民的熱狂と情熱の時代であり、一九世紀初頭の精神的空気を規定し  
ていたロマン主義によって、人々は中世に目を向けました。この時代は、  
彼らの現代と比較して、名声と名誉の時代のように見えたのかもしれま  
せん。

しかし「ドイツ」とは何でしょうか。当時の現実、希求されたもの  
のまさに反対物のように思えました。帝国、いわゆる「ドイツ国民の神  
聖ローマ帝国」は、一八〇六年に、皇帝がナポレオンに敗れて皇帝の冠  
を手放していたことで終焉を迎えておりました。そしてドイツという名  
の下で何が理解されるべきかということ、ナポレオン戦争後の時代には、  
以前にもまして緊急性のある問題でした。二つの圧倒的な大勢力、すな  
わちプロイセンと、以前の帝国の中心であったオーストリアとが競合し  
ていたわけですが、さらにこの両勢力と並んで多くの、そして明らかに  
過剰の、より小さな諸勢力が存在しておりました。そこで中世中期がふ  
たたび方向を指し示すべきものとして持ち出されたわけですが、本当に  
奇妙なことに、その「中世の」ドイツ帝国とは、ナショナルなものでは  
全くなく、ネーションを越えるものでした。けだしそれは、(南部を除

外した)イタリア、現在フランスの一部であるブルグント、そして例え  
ばスイス、ネーデルランドなどのように今日独立国家となっている他の  
諸国を含んでいたからです。MGHは、そのような帝国の領域によって  
画される範囲の歴史を、自分の守備範囲と考えたのでした。そしてこの  
ことは今日に至るまで、多少の変化はあっても続いています。MGHの  
刊行物リストのなかに、厳密な意味ではあるいはフランスの、あるいは  
イタリアの著述家、いずれにせよドイツのものではない著述家たちの作  
品を発見されるでしょう。そしてMGHは、少なくとも一定の程度にお  
いて、今日にいたるまでこのようなネーションを越えた性格を維持して  
おります。私の信ずるところによれば、このことが、私たちの研究所の  
国際的な役割と、ドイツの近隣諸国におけるその名声にとって、一定の  
重要性を持っていますし、毎年、英国、フランス、イタリアから多くの  
お客さまをお迎えする理由の一つともなっているのです。

一九世紀に無視され、それどころかあるいは全く認識されていなかっ  
たのは、ヨーロッパにおける政治的なネーションの起源と発展が、まさ  
しくこの中世に繰り広げられた一つの歴史的なプロセスであるという事  
実です。今日、一般的に、一〇世紀以前にはドイツもフランスも存在し  
なかったということに意見の一致が見られるでしょうし、若干の人にとっ  
てはこの年代も早すぎると思われるでしょう。一九世紀の歴史家にはこ  
のような問題はありませんでした。彼らはゲルマン諸部族(ドイツ諸部  
族ではないことにご注意ください)ないし諸部族国家を、端的に太古の  
ドイツ人と見なし、それ故にこれらのゲルマン諸部族の登場と彼らの古  
代末期ローマ帝国への侵入を、このプロジェクトの初期の区切りとしま  
した。少し大雑把に、単純化して言えば、五〇〇年前後のローマ帝国の  
終焉と、その約一〇〇〇年後に比定することのできるヨーロッパ近代の  
はじまりが、時代的な境となります。すなわち、ほぼ五〇〇年から一五

〇〇年までの間の歴史史料がMGHの研究の対象でしたし、現在もそのようなのです。

### 今日のMGH

もしMGHの創設者たちの夢が実現していたとしたら、私たちは今日もはや存在していないはずですが、幸いなことに、このプランはうまくいきませんでした。一八一九年に創設者たちは、このプランを五〇年以内に完結させようと考えていましたが、その代わりに私たちは昨年一八〇歳の誕生日を祝い、それでも、本来一三〇年前に終わってなければならなかった事の完成にはいまだほど遠い状態です。

この長く転変に富んだ歴史を語ってみなさまを退屈させるつもりはありませんが、それでもMGHの名声と地位が、われわれの先輩たちと、彼らが学問の世界で受けていた高い声望に負っているということだけは述べておきたいと思います。実際彼らは、中世のテキストの批判と編纂のための新しい高度な方法的水準を設定し、かくしてMGHは、様々な点で、他の諸国の比較できる、あるいは類似したプランの模範となったのです。

MGHの歴史における最後の大きな組織的変更は、第二次世界大戦の後生じました。このときMGHはベルリンからミュンヘンに引越したのです。ミュンヘンは東京と比べるとドイツ南部のちっけな村ともいうべきものですが、それでもバイエルン州の首都であり、中にはミュンヘンを「ドイツの秘密の首都」と呼ぶ人もいます。その点はどうであれ、ここは私たちには住み心地の良いところです。そして皆様も、いつかドイツにいらつしやり、ミュンヘンを訪れることがあれば、ご遠慮なくストップオーバーの地点としてMGHにもお立ち寄りください。近藤先生、保立先生、あるいは西川先生にお問い合わせになられればよろしいで

しょう。

今日研究所は、ほぼ一四人の研究者と六人の事務系の職員から成っています。予算は、総てをひくくするめて三〇〇万ドイツマルク、日本円では一億五〇〇〇万円位です。

研究所の図書室はかなりよく知られており、評判もよいのですが、本研究所の専門領域であるドイツ中世史―そして例えば古文書・古書体学のようなものも補助科学―の領域では、ヨーロッパで最も充実した専門図書館の一つです。それは約七〇、〇〇〇冊以上を擁し、ヨーロッパ全体、それと（主として）アメリカからのお客さまが研究目的でミュンヘンのわれわれの研究所を訪れ、夏期間中は閲覧室で空席を見つけないのがかなり困難なほどです。ついでに申し上げておくと、カタログはインターネットでごく簡単に見ることができます。

### 大学やアカデミーとの協力

ミュンヘンの研究所が Monumenta だというわけではありません。すくなくとも Monumenta の全体ではありません。研究所自体は小さすぎます。もし外部の共同作業者がいなかったら、MGHは特に注目に値するものではないでしょう。ここでさえもつて申し上げておくべきことは、MGHが完全に独立の組織であること、例えばミュンヘン大学の一部でなく、大学と同じく法的にも事実上も独立性を維持した法的形式をとっていることです。こちらの東京の史料編纂所とのこの違いは、おそらく過小評価すべからざるものでしょう。しかしもちろん私たちも、大学や他の様々な学問的組織との結びつきなしには存在しえません。一例を挙げれば、現在の総裁は同時にミュンヘン大学の教授ですし、私も少しチュービンゲン大学で、他の人も他のところで教えております。しかしそれよりもはるかに重要なのは、反対方向の結びつきです。MGHのために仕

事をして下さっている大学の教員が多数おられ、それゆえMGHは、一面では中世史の領域における全ドイツの様々な研究活動の中に組み込まれているとともに、他面では組織としてもある意味での統合機能を果たしているということが出来ます。さらにわれわれは連邦の各州に存在する科学アカデミーや「学術」協会のほとんど総て、さらにはオーストリアのアカデミーやスイスの類似の組織と協力関係にあります。それゆえ、通常ミュンヘンで働いているスイス人の同僚、そしてバルリン、ライプツィヒ、ウィーンのアカデミーあるいは他のところで、フルタイムの同僚として働いている者がおります。一言で言えば、外部の協力者なしには、恐らくわれわれは小さくて、ひよっとしたら不活発な研究所に過ぎないということになりかねないのですが、願わくはそうではないのです。

## 展望

以上、MGHの過去と現在について、ごく簡単にいくつかの点をお話いたしました。もちろん、もっと多くお話ししようと思えばできるのですが、例えば様々な史料のシリーズや、あるいは同様に私たちの研究所で編纂されている Deutsches Archiv という題名の雑誌について説明しても、皆様にとって意味があるか疑問に思います。この種のインフォメーションは、MGHについての皆様のイメージを特に正確なものにはしないと思いますし、数分もすれば忘れてしまおうでしょう。それも当然かと思えます。もしお望みならば、以下の参考文献をご覧になれば、詳細な情報を得ることが出来ます。ご静聴ありがとうございます。

## 参考文献

*Monumenta Germaniae Historica. Gesamtherzeichnis* (最新版) 二〇〇〇年

一月、MGHの全刊行物の目録)

Horst FUHRMANN, *Monumenta Germaniae Historica*, in: *Annali dell'Istituto storico italo-germanico in Trento* (Jahrbuch des italienisch-deutschen historischen Instituts in Trient) 20 (1994) S. 275-278

Horst FUHRMANN, "Sind eben alles Menschen gewesen". Gelehrtenleben im 19. und 20. Jahrhundert. Dargestellt am Beispiel der *Monumenta Germaniae Historica* und ihrer Mitarbeiter. Unter Mitarbeit von Markus Wesche (1996)

Harry BRESSLAU, *Geschichte der Monumenta Germaniae historica, im Auftrage ihrer Zentraldirektion bearbeitet* (1921, = Neues Archiv 42)

Herbert GRUNDMANN, *Monumenta Germaniae Historica* 1819-1969 (1969)

Rudolf SCHIEFFER, "Die Erschließung des Mittelalters am Beispiel der *Monumenta Germaniae Historica*," in: *Quelleneditionen und kein Ende? Symposium der Monumenta Germaniae Historica und der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften München*, 22./23. Mai 1998, herausgegeben von Lothar Gall und Rudolf Schieffer (Historische Zeitschrift, Beiheft 28, 1999) S. 1-15 (別冊) 二〇〇〇年 MGHから入手可能)

David KNOWLES, *Great historical enterprises*: 3. *The Monumenta Germaniae Historica*, in: *Transactions of the Royal Historical Society*. Ser. 5, Bd. 10 (1960), S. 129-150

MGHの事業の毎年の発展については、総裁の年次報告が *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters* に掲載される。

〔付記〕ゲルハルト・シュニッツ (Gerhard Schmitz) 氏はドイツの史料編纂機関モヌメンタ・ゲルマニアエ・ヒストリカ (*Monumenta Germaniae Historica*) の総裁代理。二〇〇〇年三月一二日より一八日まで、文部省の「学者・専門家招致事業」により来日され、期間中の一四日、東京大学史料編纂所の所員との懇談に応じられた。本稿は懇談会における氏の講演を、氏自身がまとめてくださったものである。懇談会には本学法学政治学研究所の西川洋一教授(ドイツ法制史)、同じく源河達史助手(同)、青山学院大学の

渡辺節夫教授（フランス法制史）、ボン大学のデトレフ・タランチェフスキ講師（日本中世史）が出席され、言葉の問題にとどまらず内容に踏み込んだ仲介の労をとっていただいた。特に西川教授は本稿の翻訳を寄せてくださった。シュミッツ氏の講演中に言及されているが、史料編纂所は二〇〇一年に史料集刊行事業一〇〇年を迎えるのを記念して、二〇〇二年一月に国際シンポジウムを開催することを予定しており、MGHにも参加を要請し承諾をいただいている。また講演の中で保立道久と近藤の名があげられているのは、一九九八年八月二五日に保立・近藤の両名がタランチェフスキ氏に同行していただいてMGHを訪問し、シュミッツ氏および同僚のシュナイダー氏と国際シンポジウムについて相談したことに由来している。

（近藤成一）